

山梨団体とは場所がちがい、市街から近く、日蓮宗説教所の周辺に入植したという。九州団体は来た人数によって土地の広さがちがつて五町歩ではなく、十町歩であつたらしい。九州団体は伐木して炭焼きをし、あるいは木工所に働きに出たりなどして現金が入るようになって、その半分以上が日宗を出ていったという。

福岡団体の入植は佐野前励亡き後になるが、なぜ入植したのか、いまはわからない。法華村建設のためか、農業経営のためか、あるいは天災が原因でか、全く見当がつかないが、どうも、入植者が信仰を同じくしていたということはいえそうだ。とするなら、福岡県朝倉郡三輪村や夜須村は、佐野前励の本仏寺とは距離的に近い位置にあることから、あるいは何らかの理由ではじめから法華村建設のためであつたかもしれない。

いずれにしても、小利別原野は、農業経営をめざして開拓するには、あまりにも自然条件が酷^きし過ぎたのであつた。

二、日宗法華村の実状

望 月 兼 雄

(現代宗教研究所員)

資料にみる日宗の開拓生活

北海道足寄郡陸別町は、十勝地方の北東端にあり、北緯四三度二七分〜三八分、東経一四三度二七分〜五七分に位

置している。交通路は帯広から池田まで根室本線で約三十分、池田で池北線に乗換え、約二時間で陸別駅に着く。

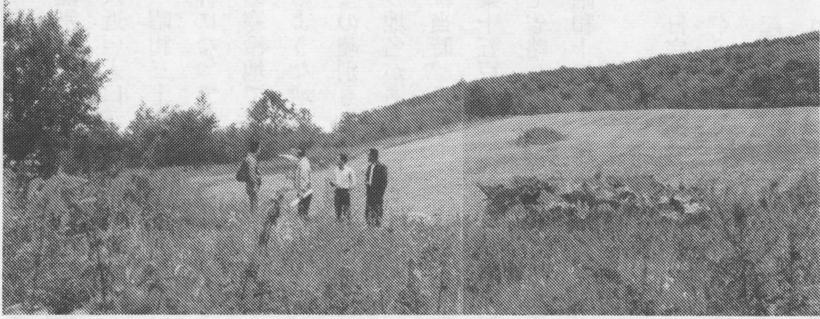
陸別町の人口は、昭和五十五年の国勢調査では五〇〇二人、世帯数は一五九二軒である。昭和三十年代初めは、一万人近い人口が、昭和四十七年では六三六八人、世帯数は一八〇九軒になり、その人口は二二%の減少である。これは、昭和三十年代以降の高度経済成長による過疎化現象のためである。陸別の土地利用面積は、八四%が国有林・民有林になっており、農用地が九・五%、原野が三・九%、道路その他が二・二%となっている。また北海道内でも有数の寒冷地である。毎年マイナス四十度近くになることも度々あり、年間を通じての温度差は七十度にもなるという。このような地形・気象等の厳しい自然条件や地理的条件が重なり、陸別の過疎化現象に一層の拍車をかけている。

この陸別もいくつかの地域に分けられ、斗満とまわ・苦務とまわ・薫別くんべつ・小利別しょうりべつ等からなっている。この陸別町小利別に日宗にっしゅうという地名がある。日宗は地名として現在使われているが、正式には「日蓮宗部落」（日宗）、当時は法華村と称した。これは当時、日蓮宗宗務総監佐野前助が、山梨県西八代郡豊和村黒沢宮沢寺住職の弟子であった広瀬啓宣を团长とし、山梨十五戸、九州福岡から三十戸の日蓮宗信徒が入植、法華村を開拓したのである。入植の経過は前に詳述してあるので省略し、ここでは日宗（法華村）の当時の状況を、調査と資料等をまじえて見てゆくこととする。

昭和十三年十二月十日発行の『陸別村史』には、次のように記してある。

日宗部落

日宗部落は小利別及び川上、信濃の各部落に連なり、西部を堺とし大曲一円を併せて一部落とし、地積は最も広く、小利別駅より約十町乃至一里半、距離は近いが、車路の完全を欠き産物搬出に至便でない。農耕地の如きも起伏破状おびただしき地形であつて、平野ほとんど皆無に等しく、全面的傾斜地のため降雨のたびに土流失を免れず、従つて耕作施業も困難である。ことに気候も悪く一部を除くほかに真に総てにおいて農業は適しない部落



現在の日宗原野

である。

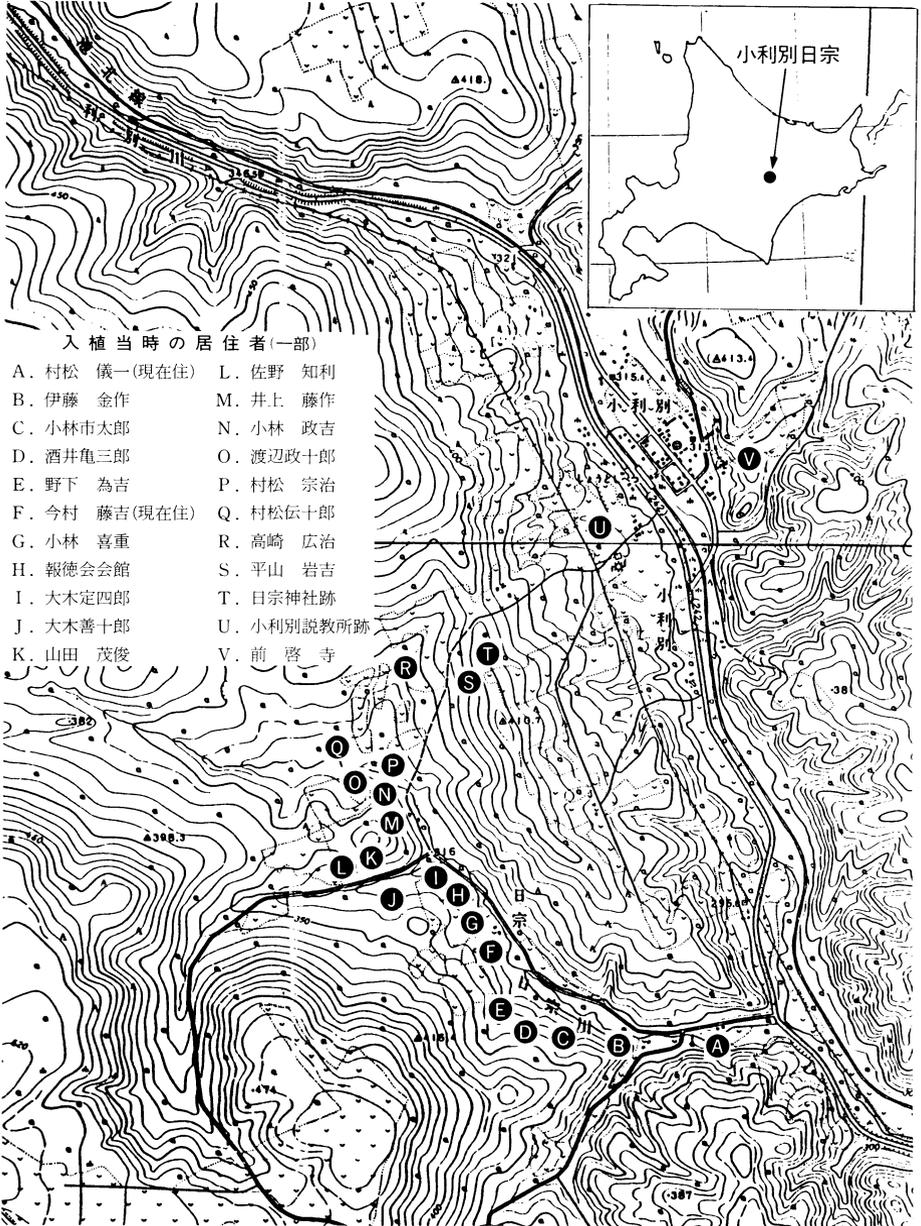
この部落は山梨（注、福岡の誤り）県本仏寺住職佐野師の宿望により、広瀬啓宣氏をもって指導幹旋に当らしめ、明治四十五年四月山梨県より小林政吉氏ほか十四名の団体を組織して入地先住草分である。以上、団員は何れも日蓮宗の信仰者であるため法華団体と称することあり。次年においても同様信徒の入地者相続き、以て日宗部落を形成せられたのである。

部落内に神社あり。説教所あり。神社は大正三年献（建）立、八幡大神の御分霊を祀る。発起人は伊藤金作氏ほか数名であつて、最初は沢地に勧誘せられたが大正八年に至り移転の議起り、現在の高丘浄地に祀つた。秋季九月十五日一回が祭典日である。

青年会館あり。会館は当初、部落民の集会所として建設されたが、青年分団に提与し更に昭和七年において部落民の寄付により、大修繕を施して完備したのである。

当初、この部落全地積は針葉、潤葉の大樹密林地帯で開墾作業は容易ならず、各自は入地二〜三年間はほとんど造材作業に従事し、当時立木代金等は一切無償に等しく労益金のみで自活の途を計っていたが、然しのち専念農業を開始するに至つた。新墾当時は各種農作物の収穫相当多く、各自は嬉々として正業にいそしみ、一時は進展を見たが、前述の如く地味・地形天候の不

小利別地形・日宗入植者居住分布



順等に災せられて惨々たることあり。最近においては、甜菜^{てんさい}・亜麻^{あま}・燕麦^{えんばく}類を適作といえども、収量は実に少なく、心細い限りであるが、部落民はよく根氣に初志を持續し改善に全力を注ぎ奮闘を惜しまず、信仰の信念を發揮し至極平和である。

本部落には、農耕地面積百八十六町内自作耕地九十五町歩、小作耕地九十一町歩あり、戸数三十一戸にして現住者氏名左の如し。

上野原市・上田岩之丈・大木定四郎・小林政吉・井上藤作・村松儀一・重松与左エ門・田中伊太郎・村松宗治・高崎関吉・津田八十吉・伊藤丹次郎・沢山栄喜人・村松伝重郎・木木善十郎・平山啓三郎・小林喜重・今村藤吉・長沢次平・竹内藤之助・工藤善四郎・中谷権藏・山田茂俊・福重熊衰裂・須藤近一・大川幸之助・野下為吉・鈴木金五郎・小林市太郎・山田茂吉・菅野栄淳（昭和九年現在）

と記されている。

これを見ると、日宗地域は大樹密林地帯であつて、開墾作業は容易でなく、農地も起伏が激しく、平野はほとんど無い状態にあり、降雨のたびに土砂が流れ、加えて気候も悪いという、農業にはまったく適さない土地であつたのである。これをさらに裏付けるような当時の状況を記した資料に、大正五年六月二日から三日にかけて調査した、当時の農事指導員佐々木晴吉氏の『新来移民農事指導の為、釧路・根室支庁管内へ出張復命書』がある。これは北海道庁長官俵孫一に提出したものである。明治四十五年に入植してから、四年程たった、当時の日宗の生活状況を垣間見ることが出来る。以下、佐々木晴吉指導員の『復命書』の内容を紹介し、日宗の当時の状況をみることにする。

移住地の状況

(イ)地勢

本地は足寄郡陸別村小利別原野に所在す。地勢は一帶の高丘地にして、海拔壹千尺余にして起伏甚たしく最も甚たしきは十尺に対し十余尺の急傾斜にして、普通に十尺に対し四五尺緩傾斜にても尚三尺位なり。而して平坦として見る処極めて稀にして、開懇其他に於て困難しつつかあるもの如し。而してポントシベツ川に沿つて低地となるも潤湿なる処ありて、中には野地坊主の叢生せる処あるを見る。

(四) 地味

表土は腐植質土にして下層は腐植質植土若しくは赤色植土にして、其間には多きは四寸普通二寸五分内外の火山灰を狭在せり。殊に大正貳年の移住地には隅も盤石の地下に或は地表に露出せる処ありて開墾には非常に困難せる処あり。本地は一帶の小笹地にして河岸の地を除くの外は乾燥地なり。ポントシベツ川に沿ふ処は砂質壤土にして下層は粘質壤土にして不良なりと認むるも、其反別全反別の約二割位あるのみ其他一般の地は高丘地として稍し中位ならん。

(五) 氣候

本地は移住以来本年迄の氣候状態は、初霜は普通九月中旬早きは九月十日前後にして、晩霜は六月上旬遅きは六月十二日なりとす。降雪は普通に十一月中旬及至十二月初旬にして、積雪一尺五寸より多きは五尺に達す。融雪は四月下旬を普通なれども地下結凍して五月下旬もしく六月上旬に非らせれば耕作困難なり。

(六) 交通の便否

網走線小利別駅付近にして僅かに二丁位にして七戸、七丁位にして二十六戸、三十丁にして二十五戸位に散布せり。道路は小利別よりクンネ別に通ずるものあれども、此の道路に副ふもの僅かに五戸にして他は苟分道路により交通せり。一般物貨の供給は小利別に於て殆んど賄ふ事の件。

移住当地の戸口数と現在の比較

氏名	大正元年	大正五年	備考
伊藤金作	九人	十人	内一人移住後生まれる
村松儀一	三人	三人	
小林市太郎	四人	二人	内二人移住後病死
酒井亀三郎	四人	三人	内一人病死
今村藤吉	五人	四人	内一人移住後生まれ二人病死
小林喜十	五人	三人	内二人移住後病死
大木定四郎	八人	八人	内一人移住後生まれ一人病死
大木善十郎	四人	四人	
井上藤作	六人	七人	内一人帰郷二人生まれる
小林政吉	七人	七人	
村松藤吉	四人	七人	内二人移住後生まれ二人病死
村松伝十郎	九人	四人	内二人移住後生まれ五人病死
渡辺政十郎	七人	六人	内一人郷里より二人病死
佐野知利	六人	六人	
山田茂吉	九人	十人	内一人移住後結婚
鈴木寅之助	三人	三人	
佐々木寅治	四人	四人	
小松寛静	四人	六人	内二人移住後生まれる

(原文を読みやすく簡略にした)

氏名	大正二年	大正五年	備考
上野原市 上野重太郎 上野福左工門 前田富太郎 吉岡吉次郎 吉賀国助 内田駒次郎 鶴田長太郎 平山岩吉 平山峯吉 高崎広治 平山啓三郎 平山庄太郎 山内延太郎 佐藤豊吉 大武満 中村宇之吉 鶴田友吉 山内新太郎 十和田与三郎	七人 六人 三人 六人 四人 六人 三人 三人 六人 三人 七人 三人 六人 二人 二人 四人 七人 五人 四人 四人 四人	七人 八人 四人 七人 五人 三人 四人 六人 三人 七人 三人 七人 二人 一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人	内一人移住後生まれ一人病死 内二人移住後生まれる 内一人移住後生まれる 内一人郷里より来たる 内一人移住後結婚 内二人移住後他へ嫁入、一人結婚せり 内一人移住後生まれる 内一人移住後生まれる 内一人移住後生まれる 内一人移住後生まれる 内一人移住後一人病死 内一人帰郷(妻)一人入営(弟)一人病死 内一人入営 内一人移住後生まれ一人病死

十和田 左一	七人	七人	内一人移住後生まれ一人病死
沢田 松次郎	六人	七人	内一人移住後生まれ
松尾 宇吉	五人	四人	内一人移住後不明
関 国太郎	四人	四人	
大野 叶次郎	六人	六人	内一人移住後生まれ一人病死
重松 与左エ門	五人	六人	内一人移住後生まれ
福本 八五郎	五人		大正五年三月に郷里に帰る
馬場崎大左エ門	二人		大正二年五月に郷里に帰る

この他、移住以来、単独で移住するものもあり、人数の変動は入植後または途中で増減しているものと思われる。このように、四十六戸二三二名(九州団体は大正二年四月二十二〜二十三日であるから、それ以降の調査と考えられる)であったが、大正五年の調査では、二二一名になっている。入植地での誕生が多くあるものの、病死・帰郷・入営・不明と、開拓がいかにきびしく惨々たる闘いであったかを窺い知ることが出来る。

開墾の状況

大正元年式年四月移住以来各自の貸付地に入地し一戸もしくは数戸を以て粗末なる居宅を建て、伐木及下草の焼払を行い局力開墾に従事し従来本年迄での成績を挙げれば左の如し。

氏名	大正元年	大正五年
伊藤金作	一町二反	四町
村松儀一	八反	二町二反

以上が明治四十五年四月十五日に入植した山梨団体の開墾反別である。

次に、大正二年四月二十二〜二十三日に入植した九州団体の開墾反別をみる。

小林市太郎	八反	二町五反
酒井亀三郎	六反	二町五反
今村藤吉	七反	三町
小林喜十	五反	一町二反
大木定四郎	八反	二町五反
大木善十郎	六反	三町五反
井上藤作	八反	二町五反
小林政吉	一町	三町五反
村松藤吉	九反	三町
村松伝十郎	九反	三町二反
渡辺政十郎	一町八反	四町八反
佐野知利	一町	四町
山田茂吉	二町	六町五反
鈴木寅之助	一町三反	三町五反
佐々木寅治	八反	二町五反
小松寛静	一町二反	三町

(原文を読みやすく簡略にした)

氏名	大正二年	大正五年
----	------	------

沢田	十和田	十和田	山内	鶴田	中村	大武	佐藤	山内	平山	平山	高崎	平山	平山	鶴田	内田	古賀	吉岡	前田	上野	上野	上野
松次郎	左一	与三郎	新太郎	友吉	宇之吉	満	豊吉	延太郎	庄太郎	啓三郎	広治	峯吉	岩吉	長太郎	駒次郎	国助	吉次郎	富太郎	野福左工門	野重太郎	野原市

六反	八反	一町	五反	五反	一町	五反	五反	五反	八反	六反	八反	一町八反	八反	六反	六反	一町	五反	八反	八反	一町二反	一町
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	------	----

四町	六町八反	五町	四町	三町五反	四町三反	四町	四町	四町	六町五反	四町五反	六町五反	五町五反	六町八反	三町八反	三町五反	四町五反	二町五反	三町八反	二町五反	四町	四町
----	------	----	----	------	------	----	----	----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	----	----

松尾 宇吉	六反	四町
関 国太郎	六反	五町
大野 叶次郎	六反	四町
重松 与左エ門	八反	五町

以上である。これを見てわかるように、入植当時の各自の貸付地も広さは様々である。また、入植から数年の間に少なくとも倍以上にはなり、多い所では八倍近くの密林地を開墾している。その苦労はなみなみならぬものであったに違いない。それだけ開墾は入植者にとっては生命がけのものであつたことが推察される。

耕作物の状態

開墾した農耕地の耕作物は、次の通りである。

山梨団体

種類	大正元年	大正五年
馬鈴薯	三町六反	七町
そば	十町八反	十一町
もろこし	一町	五町
菜豆	二町	十六町四反
裸麦	なし	七町
えん麦	なし	十町
その他	三反	一町五反

九州団体

種類	大正二年	大正五年
馬鈴薯	四町五反	十二町
そば	八町	二十一町
もろこし	一町	十三町
菜豆	二町	二十九町
裸麦	なし	十四町五反
えん麦	なし	二十五町
その他	二町九反	二町五反

以上のように、入植当時から較べると、耕作面積は拡大されるようになったが、このうち種子を除いて売却したのは、僅かにえん麦のみであったという。収穫物はようやく各自食糧をみたすに足るだけで、売却する余裕はほとんどなかったのである。また、家畜は山梨・九州団体を合わせても、僅かである。馬は十二戸で十三頭、鶏は十五戸で五十七羽であった。

副業

収穫物が、自家食糧をみたすのみで売却できず、冬の間は副業を始めた。これは、日用品の物資を買う金銭がなかったから現金収入の方法であった。働き手の男性たちは、十一月より翌年の三月まで、小利別の製材所で丸太切・製材の人夫として労働に従事した。少ないもので二十円、多いもので百円、平均は五十円前後の収入であった。また他に製炭販売をするものがあり、立木を売って収入を得ていた。

移住当時と現今(大正五年)の生活状況

移住当時は何れも一戸若しくは数戸共同して粗末なる居宅を建て、屋根は葎草・草葎・皮葎にして壁は草木皮等を以て囲ひ僅かに雨露を凌ぐに止めたりしも、現今に於ては多少の修繕を行へものあり或は新に建築するもの二三戸あるを見る。移住当時は日宗本山より同年八月迄ては家族に応じ、味噌の貸与し年賦の償還をなさしめたり。然れども大正貳年の大凶作の為め償還するものなり反を貸与せざるべからざる状態となるに至る。故に各自は、冬期間に於いても種々の労働に従事し各戸が相共に開墾及耕作に勉励し食物も移住当時と異なり極めて粗食を取り、普通に馬鈴薯、蕎麦、裸麦等にして米は僅かに交ゆるか或は交へざる事さへあるに至れり。殊に大正貳年の凶作に至りては総代人は非常に心配し種々の冬期副業を設け大に励ましたりき。其後、同地の気候及耕作の方法、作物選定等を合理的に行ひ相当の収穫を見るに至れるを以て本年は各戸共土着の決心を以て大に奮勵し耕作に従



日宗法華村を語る人たち



現在も日宗に住む村松さん

事せり。今後更に一層の注意を以てせば将来に於て見るべきものあらん。

其他

(イ) 飲料水

移住当時は小利別川及溪流を使用せしも、現在は遠く上流に移住民の入地せるもの漸く増加せるを以て井水を飲料に供するもの、全戸約七割に及ぶ。

(ロ) 学校及郵便

学校は小利別市街にありて現今通学しつつあり。郵便

は陸別局の集配に係るものにして融日に集配を行へり。

以上、大正二年の大凶作で決定的ダメージを受けた日宗だが、総代人及び村民が奮励し、日宗に土着するようになったと記されて、この大正五年の『復命書』は結ばれている。

日宗開拓生活の実際（体験談）

次に、このような状況におかれた、入植当時からの日宗関係者の生の話を、調査過程で聴く機会を得た。

日宗の人々は離散し、その大部分は消息不明であり、移住時の生存者は数人である。そのうち子どものとき移住してきた三人の老人に会うことができた。日宗生れの人達も含めて貴重な体験談を窺った。その一部を紹介する。

(1) Aさん(女性) 明治三十六年生まれ。山梨県西八代郡豊和村黒沢出身。十歳で日宗に入植。

明治四十五年四月十五日に、三歳の弟をおぶって入植した。が、その日に三歳の弟が死亡。引越の為、忙しくて葬儀もできず、味噌だるに入れて現在の前啓寺の周辺に埋めた。その後、五月五日に住居ができたが、^{むし}筵の家で地面には笹をひいて馬小屋みたいなものであった。しかし雨が降ると雨水が入るので、小利別の木工所から^{まさき}枳をもらって建て直した。他の入植者も同じで、自分の住む土地を見つけ家を建てていった。一軒もしくは数軒が共同で粗末な家を建てた。屋根は^{むら}枳ぶき・^{むら}笹ぶき・皮ぶきで、壁は草木の皮等で囲い、わずかに雨露をしのぐだけの掘立小屋であった。

また、入植者の中には家族十人で入植し、翌年には五人が死亡したという家族もある。

この近辺は鉄道敷設（当時の網走本線）の為の服役者が多く埋められており、例えば木工所に住んでいた家族は、大正十年までに五人が死んでいった。おかしいと思いきその家の下を掘ったら、服役者たちが五人ほど埋めら

れており、また、裸のまま埋められた死体も多数あり、これを見た入植者が具合が悪くなり死亡したということもあつた。

当時の常食は、落^{ふき}で、どこへいっても野生の落^{ふき}を取り塩煮にして食べていた。一番のごちそうは、蚊帳^{かや}で捕つた魚であつた。当時の小利別では魚が捕れた。

あとは茸^{きの}がごちそうであつた。その後、木を切り開き、燃やし、そこから畑を耕し始めた。本当に一^{ひと}畝^{つら}を精根こめて、そばを作り、馬鈴しょ・麦・豆とできるようになつていった。

しかし、入植当時から脱落していく人も多く、ほとんどは生活が成り立たないということが原因であつた。いくら土地をもらつても、山の様なので畑を作るにもどうしようもない。たとえ畑を作つても、野菜ができるようになるまではどうしようもない。結局、畑を作ろうにも山地なので収穫は少なかつたし、また、それに加えて寒さが厳しかつた。雪も七尺以上積つたこともあつた。当時、入植した時はこんなに寒いとは思わなかつたし、自分はまだ小さく、日宗入植は両親が決めたことなので仕方がなかつたが、こども心に辛い思いをした。

大正二年の大凶作は、穫れてもそばで、馬鈴しょはほとんど穫れなかつた。またネズミやウサギの被害もひどかつた。畑が狭いので、自分たちの食糧で精一杯で他に売るといふことは、ほとんどできなかつた為に、冬は木工所で副業をしていた。

また、大正末から昭和初期の大恐慌の煽りをうけて、日宗は「首つり部落」とも言われた。その数は十六人にもなり、生活苦でしかも現金収入がなく、内地に帰ろうにも帰れなかつた。また、自分の両親も親戚のために高利貸しから金を借りたが、その利子が膨大な金額になり、入植以来の耕した畑を他人に手離すことになつてしまつた。そのため、夜逃げ同然で日宗から出ていき、その時に、薪を背おつて逃げたのを覚えてゐる。

(2) Bさん(男性) 福岡県朝倉郡夜須町出身。大正二年、十一歳で日宗に入植。大正九年に日宗を離れる。

平山岩吉という人が団体長で、法華信仰で有名だった。当時二十四戸が九州から入植したが、途中で増えていったと思う。日宗での九州団体は、小利別市街から少し登った所(移転前の前啓寺付近)に入った。九州から来た人の名前は、覚えているだけでは、平山・上野・古賀という名を知っている。

自分は家族七人で来た。山の中に入り、木を切り、家を建てることから始まったが、山林ではどうしようもなく、全部が家を借りて働き手だけが小屋を建てはじめた。しかし、道具もなく協力して全員の家を建てたが、壁は草、屋根も草で掘立小屋のようであった。また山中に建てたので隣に行くといっても一人では迷っていけなかった。

九州団体は、入植人数によって土地の広さが違っていった。土地は木が生い茂っていて、切り倒した後、燃やしていたが、畑を耕す場所がなくどうにもならなかった。伐採は馬等で引かせていたが、冬の間は特に苦勞をした。その後、炭焼きにしたり、鉄道の枕木に使うようにもなった。

(3) Cさん(男性) 大正八年、日宗生れ。昭和二十二年まで日宗に定住。両親は九州福岡から入植した。

入植当時のことは、親から聞いて知っている。両親が入植した十八戸の他に、相前後して人数が増えていった。密林のような所を開墾していったが、少しでも耕していかないと自分の物にならなかった。ある程度、耕せば自分の物になり、今の様にお金を出せば畑をくれるのではなく、耕せば畑をくれるということになっていた。

入植した当時は、木工所もあったことから、木を分けてもらい簡単な小屋を建て、水車で水を引いて生活していた。また、冬の間は囲炉裏の火を絶やさなかった。

寒さについては、当時、マイナス四十二度前後まで下がったこともあり、今のよう防寒着や防寒設備がなく

ても学校はあつた。生木なまぎが寒さで裂けることも度々あり、朝方にはこれが獣の叫び声のように聞えた。そのため、農作物はほとんど穫れなかつた。入植しても長続きはしなかつた。小学校の頃は空屋がたくさんあつた。それも、一時期は木工所が三、四軒あり、陸別の人たちも多く入つてきて盛んな時期もあつた。しかし農作物の收穫はほとんどなく、冬は山で副業の伐採をしていた。自分たちがもつた木を炭にして焼いたりしたが、寒さは変わらず、反対に炭にする木がなくなり、収入は減つていった。そのために段々と人数が減つてきたのである。当時の自分たちの耕した畑は売つてしまい、現在では植林されて、再び山林になつてしまつた。

災害と恐慌の中の日宗

このように厳しい自然条件や、土地の悪さ等が比例して開拓生活は困難を窮めた。加えて自然の災害と経済恐慌が、さらに苦しい生活状況に追いやつたのである。様々な災害が北海道内を見舞つた。この災害は大きく三つに分けられ、大正二年の凶作及び水害、大正八年・十一年の水害、昭和初期の凶作と恐慌である。これらの災害が、日宗を衰退させていく原因の一つでもあつたのではないかと思われる。

大正二年の大凶作については、当時の日宗関係者の話にも出ていたが、昭和十二年十二月三十日発行の『北海道凶荒災害誌』には、次のように出ている（口語に改めたところもある）。

大正二年は平年に比し各地共気温著しく低く、降霜も平年より約半月早く、九月十四日初霜を見、加えて八月二十七日・二十八日の両日には暴風雨の襲来あり。これが為甚しく作物の成熟を害し未曾有の大凶作を現出するに至つた。……（中略）……又大豆、小豆、玉蜀黍の如きは霜に対する抵抗力甚だ弱きを以つて、著しく收穫を減じ、翌年の種子をすら得られざる地方が多く、殊に農民の常食たる稲黍、そば等は暴風雨の為多大の損害を受けて収

穫著しく減少し、ついに糊口に窮する者を続出するに至った。

また移住民の被災者の状況を見ると、

移住後相当年月を経過し若干の蓄財を為し、家屋什器の如きも次第に設備し平年作なるにおいては些しの苦痛を感じざる者も今や蓄財を消費しつくし、衣服、什器、家畜等売却して僅かに食糧を得るといふ境遇に陥つたのである。又移住後日浅き者は、わずかに茅屋に雨露を凌ぎ、食糧欠乏するも衣服、什器、家畜等売却すべき物無く、やむなく山野に木草を求め、又は櫛の実を拾い集めて食するという悲惨なる状態であつた。

と記されている。大正二年ということは、日宗山梨団体が入植してから二年目、九州団体の如きは入植した年に当たり、ただでさえ開墾困難だつた日宗では、この大凶作の煽りをまともに受けたのである。大正二年の農作物作況調べを見ると、平年に比べ米の収穫高は五%減であり、以下、菜豆五六%減、大豆三三%減、小豆三一%減、玉蜀黍三五%減、そば四五%減、馬鈴しよ八六%減となつているが、これは北海道全域の集計であり、ひ弱な日宗の農地では、これ以上の被害を蒙つたと思われる。これを裏付けるように、日蓮宗もこの凶作に対して全国から義捐金を集めている。一部を紹介すると、大正三年一月二十五日号の「日宗新報」には、

東北北海は未曾有の大凶作に依て、飢餓に迫れる同胞数を知らず。殊に法華村の窮状は、吾人の最も同情に堪えざるところなり云云。

と、また同年二月一日号には、

北海法華村窮状、救恤義捐金募集。窮状惨状すでに大方の知れるところなり。本社は諸彦の同情に訴え先づ同行救済を第一着手とし東北北海の中には特に法華村慰問に力を注ぎ云云。

と全国寺院に呼びかけ、義捐金を集めている。この義捐金は、大正二年末から送られており、大正三年の元旦には餅

米として一戸に三升または五升の範囲において配布され、元旦の初膳に備えられている。しかし、この義捐金も限りがあり、同年三月十五日号には、法華村近況と題して、

多数の寄付ありといえども、実際は団員もまた多数のこととて、これを以って全壁の救助をなし終れりとも言ひ難く、殊に凶作の実地影響は日を経るに従つて甚しき、本年八月にも至らばそばも馬鈴しも收穫に能わざるの悲境に陥るべし云云。

また、

団員二百六十余名はほとんど無一文にてかせぎつつあり。

と記してあり、当時の被害状況と団員員の生活状態が克明に記されている。

次に、大正八年・十一年の大水害であるが、大正八年の資料が非常に少なく、陸別町で出した『陸別町開基六十年記念要覧』に多少載っているだけである。要覧を見ると、

大正八年の大水害の被害、利別川や各河川が氾濫し、橋梁が流失する事故が続出。鉄橋が破壊し、線路は飴あめのように曲がり、鉄道は十五日間も不通となった。市街地の家には浸水し、人々は寺や学校に避難し、被害額は相当な数字になった。

とある。

また大正十一年の水害は、『北海道凶荒災害誌』によると、

大正十一年八月二十四日より二十五日にわたる本道の水害は、明治三十一年のそれに匹敵する大惨害にして、ほとんど全道を襲い、大小河川の河畔に連なる肥沃の田畑は一朝にして荒無地と化し、鉄道線路の損害を除きても二七〇〇余万円という多額の損害を招いた。

と記され、日宗の生活や農作物に大きな影響を与えたことは確かである。折しもこの日は、日蓮宗布教隊が巡回している時であり、大正十一年十月十日号の『日蓮宗宗報』に、

二十五日は小利別・法華村の二カ所において布教を為す予定なりしが、前夜の強雨にて各河川は近年希有の出水にて鉄道、トンネルの破損甚だ多く、根室線網走線の被害殊に著しく交通全く杜絶したる為、汽車の開通するまで布教を中止するの止むなきに至れり。遂に一週間本別において滞在することとなれり。

と事態を記している。

昭和初期の凶作と恐慌は、昭和四年にアメリカの株式恐慌に発端した世界的大恐慌に日本も巻きこまれ、このために農業恐慌、さらに大凶作となった。北海道も例外ではなく、軒なみに農作物が減退していった。殊に昭和六年の凶作は、大正二年以来の大凶作となり、一般農家の収入は、平年の三割にしかならなかった。日蓮宗でも再び、北海道並びに東北地方凶作義捐金を募集したが、昭和七年四月十日号の『日蓮宗宗報』に掲載されている、第二十六宗会議事録には、

近年稀なる大飢饉に襲われし東北、北海道における罹災者の救助に関しては、満蒙事変の為一般の注意を惹くと遅かりしが云云。

と記され、凶作の対処が遅くなったことを窺わせている。

前啓寺の創立

このように、入植当時から様々な悪条件を克服し、度重なる災害を切り抜けていった入植者たちを支援、心の拠り所になったのが前啓寺である。前啓寺は、明治四十五年に入植した山梨団体の団体長、広瀬啓宣が入植者と共に建立

した寺である。前啓寺は、当時法華寺、入植当時は小利別説教所と呼称されていた。『湊別村史』には、次のように記されている。

日蓮宗小利別説教所

本寺は明治四十四年筑後国本仏寺住職佐野師（原文ママ）（日蓮管長）宿望により現在の地に法華村を形成すべく志を決し、当時雨龍郡由仁村広宣寺住職広瀬啓宣師を以て斡旋の任に当て、翌四十五年四月山梨県より日蓮宗信仰者十五名（戸の誤り）の移民が入地したのに始まる。

移住者入地と同時に啓宣師は信徒と共に相計り説教所を建立すべく準備を急ぎ工事に着手し、大正元年十一月現在の説教所を建築落成すると共に、小松寛静師主任として任ぜられ同氏は専ら布教に励められたのである。

越て大正二年四月福岡県より同信仰者二十九戸の移民を見るに至って、ようやくここに法華部落を形成し従つて他方よりの檀信徒も多くなり上野原市、平山岩吉、伊藤金作、大木善十郎氏等世話人となつて尽力は特筆に値するものである。大正五年総代及び世話人の選挙の結果、伊藤金作、平山岩吉、世話人平山峯吉ほか二名。大正六年小松寛静師退任、翌七年二月中野寛貞師就任、同年及び八年に亘り各尊像及び什器等を上野原市氏ほか数名の信仰者により寄せられて説教所完備を告げるに至った。大正十四年総代及び世話人を改選、古賀千太郎、上野原市、古賀国助、鶴田長太郎、世話人、大木善十郎ほか四名。昭和二年六月中野氏退任、同年八月曾又英常師後任せらる。昭和六年十一月曾又師退任、翌七年十一月菅野栄淳上人就任せられて現在にあり。

昭和七年一月上野原市、古賀勝己、大野叶次郎の三氏は檀徒を代表し、小樽市に出張し緑町妙龍寺広瀬上人を訪ひ同氏所有の畑地三戸分を本寺の基本財産として寄付の快諾を得たのである。更に同年十二月、本寺を小利別市街地へ移転を企て広瀬上人より三百円、一般檀徒より百円の寄付により将来寺院とすべく浄地七町五畝歩買いか

める等基礎の充実を計りつつあり。

となつている。

また当時の『法華寺記録帳』には、「法華寺誕生記録」と題し、

筑後国本仏寺の住職当時主務院管長佐野前助師の設計に依り、当地に法華村を組織することに定め、当時雨龍郡由仁村広宣寺の住職広瀬啓宣師をして是に当らしむ云云

と記してある。この小利別説教所のことを、当時の日宗入植関係者は、次のように語っている。

小利別説教所は、明治四十五年に移住してから入植者全員で本堂を建てた。下水を掘ったり、お寺のことは全員が何でもした。日宗といえはお寺のことしか頭がない人もいて、寝ても起きてもお寺のことばかり考えていた。

だから、日宗全員の心の拠り所はお寺であつたし、お寺に来れば皆に会えた。お寺がなかつたら日宗の強い団結心はなかつたと思う。

このように幾度かの大凶作や水害にもかかわらず、入植者全員が一致団結して耐えたということは、いかに説教所が入植者にとつてかかせないものであつたかがよくわかる。

説教所でも、これに応えるように、講や御会式を行なつた。毎年四月十五日が日宗の祭日である。これは明治四十五年四月十五日に入植したのを記念日としたものである。また講は、毎月十五日に行い、当番制で米五合、お金二十錢を出し合つて開いていた。御会式は十月十二日に行い、日宗全員が米を持つて十一日の朝から説教所に泊まりがけでいき、当時の活動写真や芝居などを村中で催したという。

また、日宗で生まれ育つた人も、この当時のことを、

小さい時に墓参りに連れて行かれ、説教所で白い御飯が食べられるのが嬉しかった。



倒壊寸前の前啓寺

と記憶している。

日蓮宗から、大正年間には二度ほど身延山法主が御親教に
来寺している。身延山歴代法主の年代を考えれば、当時の身
延山七十九世小泉日滋法主と思われるが、大正六年十月十六
日号の『日蓮宗宗報』には、

身延山主布教、小泉大僧正は老軀を厭わず北海道一円に
亘りて布教す。

と記され、この時、日宗に来寺したのではないかと思われる。
その時には、日宗全体でお迎えし、檣やぐらを作り、船の型をした
神輿かみこし（移住前には船方や船大工を職としている者が多かった）に
花を飾り、法主を乗せて小利別駅から日宗まで運んだそうで
ある。法主は、何も土産はないけれども、「蔵の宝より、身の
宝、身の宝より心の宝が大事だ」と日蓮聖人のことばをあげ
て三時間ほど説教されたことを、日宗関係者の一人は、昨日
のことのように話してくれた。

また、『法華寺記録帳』には、昭和四年九月八日に、「身延
山管長杉田日布上人が御来山」したと記されている。

また、日宗内には、報徳会館が設置され、独自の学校教育

や集会所として利用し、昭和二年頃までは、日宗も繁栄していたのである。

しかし、昭和の恐慌と凶作により日宗も衰退していく。先に述べた当時の日宗関係者の話にあるように、生活苦から十六人が亡くなり、日宗は「首つり部落」と言われ、また凶作のため収入がなく、内地にも帰れなかった等の状態に陥ったのである。説教所も、昭和十三年には小利別市街地への移転建立で開堂式を挙げたが、昭和二十年以降は戦争後の混乱、山林木材の払底、厳しい自然条件により畑作物が穫れないなど、生活条件が悪く、日宗住民も近隣の土地に移住し、離村が多くなっていったのである。説教所も、昭和二十四年七月二十一日には、寺号公称して「甲福山前啓寺」となったが、当時の日宗関係者は、

人数が随分と減って、皆近隣の町や村に引越してしまい、置戸町おけとの方まで住職が月経に行っていたのを思い出す。また離村して行った人たちが、時々前啓寺に墓参りに来ていたのを覚えている。前啓寺が宗教活動を停止したのが、今から十五、六年前だと記憶している。当時、北見の方から坊さんがきていたがすぐ亡くなってしまい、それから活動が停止してしまった。

寺号公称以後も、数人の住職が前啓寺に入ったが、現在では無住、廃寺同然になり、当時の面影を偲ぶにはほど遠いものがある。日宗当時の関係者が、「今のお寺の姿は哀れだ。昔のお寺が懐しい」というほど荒廃している。

現在、前啓寺には、「開教開拓日妙上人彰徳碑」が建っている。日妙上人とは、広宣院日妙、広瀬啓宣である。その碑面に上人の経歴が刻まれている。

権大僧正日妙聖人 者姓 広瀬字 啓宣号 広宣院 山梨県人 明治十一年生 昭和十九年十月十四日於
自坊小樽妙龍寺ニ遷化ス矣。世寿六十八、実ニ而本道布教四十有三年也、明治四十三年日蓮宗宗務総監佐野前勸
僧正 樹ニ本道 信仰移民宗教開拓之計画一被ル命ニ由仁広宣寺住職聖人ニ聖人即一以ニ至誠ヲ勸奨ス得ニ山

梨福岡二県四十余戸^一、大正二年四月入^リ、小利別^ニ、開^キ法華村^一、率先^{シテ}、振^フ開墾之斧^ニ、併^{セテ}創^シ一字^一策^ニ、勵^{シテ}本化^ノ、信行^ヲ所作^ノ、仏事末^ヲ、暫^{クモ}廢^セ、矣往昔無人^ノ、未開地^ハ、今日県民大挙^{シテ}生産^ス、可^レ謂^シ、大聖人之徳業^於、是乎村民^ノ、有志^顯彰^ニ、遺徳^ヲ以^テ申^ニ、報恩^ヲ欲^{シテ}、伝^フ後昆^ニ、而茲^ニ勤^ム之^ヲ。

大光山妙龍寺六世道民、伊藤啓龍日秀撰、東邦長谷川讓書

と記されている。となりには、歴代上人の墓標と、時代の趨勢^{うよせ}と共に衰退していった前啓寺本堂が、日宗の方向を望む位置に建ち、しかし、庫裡は崩壊し、本堂は朽ちかけている状態である。

三、日蓮宗教移民の歴史的社会的背景

久住謙是

(現代宗教研究所調査主任)

一

日蓮宗移民、法華村の成立と現状を、前二章で、追究してきた。どのように移住して、開拓を進めていったか、事実を明らかにしてきた。

日蓮宗が進めた開教事業としての初めての試み、法華村の創設を知るためには、その歴史的社会的背景の理解によ